東京五輪は「破壊」のチャンス（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2014/5/27 7:00|日本経済新聞　電子版

鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催、自宅は蔵書に埋もれる。

先進国では最多の祝日のある日本だが、2016年からは、また新たに祝日が増えるらしい。迂闊（うかつ）にも見過ごしていたのだが、今度は「山の日」をつくるのだという。「海の日」があるから、「山の日」があってもいいという話らしい。日本山岳会の要望に政治家の方が対応したのが、その経緯らしい。豊かになったのだから、どんどん休日を増やせということなのかもしれない。土日があって、振り替え休日があって、お盆休み、年末年始の休みがある。1年で実際に働く日は、200日程度になる計算になる。月月火水木金金などという歌まであった窮屈で悲しい時代は、遠い昔の話である。それにしても「海の日」、「山の日」があるなら「河の日」、「里の日」、「子づくりの日」等々、いくらでもいい加減な祝日の名目を思いつくのだが、豊かになったら豊かになったで、おかしいことがいくらでも実現する気がする。世の中、緊迫の度を増す世界の状況をよそに、豊かで平和なのである。朝、テレビをつけたら、自衛隊機と中国軍機が30メートルに接近したという。中国船がベトナム船に放水をし、ベトナム船が被害を受け、負傷者が出たという。人ごとと捨て置けない事態が増大していることは間違いない。

私のような貧乏性が身についた人間は、平日だけでは友人知己との酒席の日程を確保することが難しくなって、昨今では、休日の夜も使わないと間に合わなくなって、休日の昼はゴルフ、夜は酒席にあてるといった常軌を逸した生活になったりする。たかが酒席をこなすだけのために、愚かなことだと言われれば、その通りである。先週末の休日など、朝早くからゴルフ、午後は懇意にしているイタリア人指揮者、リッカルド・ムーティさんが指揮をするオペラのマチネーに行き、夜は知人と酒席といった馬鹿げた一日となったりする。翌日は翌日で、時間を縫うようにして、上野の五條天神の祭りまで眺めに行ってしまった。音楽祭でお世話になっている商店主さんが、法被姿に変えて、神輿の周りをうきうきと働いていた。自分の商売より、地域の世話を優先するのが上野の商店主さんの姿で、祭りは一大行事なのである。

祝祭日が増えて時間がなくなったと感じる私の場合、それは休日の多少の問題ではなく、断るということをしない、余計な用をつくるといった私のだらしない性格のせいに違いない。夜遅く家に戻ると、その馬鹿な暮らし方を反省し、シャワーを浴びて、コーヒーを飲みながら酔いを醒まし、本を読みだす。ついつい深更に及ぶまで、読みふけってしまう。週明けがいつも一番疲れている状態になる。貧乏性が高じると、生活のリズムが消えてしまう。海外を飛び回ることが多いのだが、フライト中は、長い時間、うつらうつらしていればいいわけで、海外出張の時の方がかえって骨休みになる。今や死語になった「ワーカホリック」という言葉通りの生活である。もっとも友人知己との酒席やゴルフは「遊び」に過ぎないのだから、「遊び」を減らせばいいという適切な指摘もあって、他人には言わないようにしている。

学生時代、京都の大学の先生に、祇園にあった小さな料亭に招かれたことがある。京都では著名な方で、学割というか、料亭の女将が格安で使わせてくれていたに違いないのだが、小さな玄関に良寛の書の掛け軸があって、目が離せなくなるほど惹きこまれたことがある。書など、まるで知識も鑑賞眼もないのだが、その書を見たくて、社会人になってから、その料亭を何度か訪れたことがある。案内をしてくれた先生には、「君さあ、あれは偽物に違いない」と、からかわれたのだが、その真偽はともかく、毎日でも眺めていたいほどの書だった。

新緑があふれるこの季節になると、良寛の代表作といわれ、詩碑にもなっている「天上大風」という書と言葉を思い浮かべる。良寛は、頼まれてもめったに筆を執らず、「近ごろは物事すべて不出来候。筆も残らず切れはて候。たとひ有りても手にとらず候。」といった断りの一筆もある。ただし、良寛にも弱みがあって、子供に酒か手毬などを持たせて頼むと、嫌とは言わなかったという。「天上大風」も、そんな経緯で書いたのだろうと言われているようだが、田舎の童子に「凧（たこ）になにか書いてくれ」と頼まれて、その場で思いついて書いたものだとも言われている。天に舞うようなのびやかな「天上大風」の書とともに、この言葉を思い出すと、鬱然とするような世事のことなど、どこかに飛んでいくような気がしてくる。まして、「天上大風」と書かれた凧が空を舞っている姿を想像するほど、爽快な光景はない。終生、寒さに震えながら寂れた庵（いおり）というか、茅屋（ぼうおく）に身を潜めていた良寛の日々だからこそ、無欲恬淡（てんたん）、自然で抜けるような爽快な言葉が浮かんだに違いない。流露な字も厳しい修行によって得た境地から自然にあふれたものとしか考えられない。

沫雪（あわゆき）の中にたちたる三千大世界（みちおほち）またその中に沫雪ぞふる　良寛

東京オリンピックの開催が決まり、オリンピックに向けて東京の大改造案が様々なところで提案されているようで、時々、何を思ったか、私のもとにも、そんな提案書をもって相談が来る。大方は、どさくさに紛れてというのも言い過ぎだが、この機に乗じて何とかならないだろうかいった類の案が多い。主役となるデベロッパーさんの提案をよく見ると、容積率を変えることによって、土地利用の自由度を拡大するといった趣旨が多い。音楽関係者からは、世界的なオペラ&バレエシアターをつくろうとか、その趣旨が悪いというわけでもないが、「この際」といった便乗的な要望案が表に出ているようだ。

前回の東京オリンピックから50年。廃虚からの復興への加速度を増すという趣のあった前回のオリンピックを開催にこぎ着けるために、景観とか都市計画の基本にあるべきコンセプトを犠牲にしながら様々なインフラを構築していった結果が、現在の東京の基本的な姿を形作ってしまった。水の都であるはずの東京の川は、高速道路にかぶせられ、日本橋すら高速道路の下に暗く押し込められてしまったままである。マンハッタンの真ん中を高速道路が縦横に走ったり、シャンゼリゼやセーヌ川が高速道路の陰に隠れたり、といった暴挙はあり得ないはずが、東京の都心は縦横に走る高速道路に蓋をされたままの光景である。日本を勉強してきたという海外の友人が日本橋を案内しろというたびに、高速道路の下で、暗くひっそりした日本橋を見せるのが恥ずかしい。先日も、日本橋を案内した友人から「日本では、五十三次の広重は大切にされていないのか」と聞かれ、1964年という時期にオリンピックを開催することがどんなことだったかを説明したのだが、腑（ふ）に落ちないという顔をされたままだった。

50年を経た後に、再びオリンピックを開催するという折角の幸運を生かすには、前回のオリンピックで構築された都市の姿を破壊し、歴史を踏まえて、あるべき姿に再構築する事始めの機会としたらどうなのだろうと思う。道路で言えば、環状線のインフラ構築が進むに従い、都心を横切る高速道路については、撤去するか、地下道化するというのも、1964年に構築された構造を破壊する大きなインパクトになるはずである。

わずか30年前に次々とつくられた、都心から40分から1時間程度の距離にある大集合住宅の多くが、今やゴーストタウン化し、高齢化した人々が大集合住宅を離れ、都心に移り住む流れが膨らんで、都心部の区では人口増に転換しているという。その多くの人々が高齢者ということもあって、教育施設をつくることもないわけで、区の行政に負担をかけることもなく、マンション建設も急増しているようだ。日本の高度成長を支えた団塊世代のほとんどが、リタイアをし、人口減が顕著になり、超高齢化社会に移る日本の都市は、当然、その基本的な構造に対応した都市づくりが必要なのは言うまでもなくて、2020年の東京オリンピックは、思い切ったスクラップ・アンド・ビルドに踏み切る大きなチャンスである。

スクラップ・アンド・ビルドほど、日本の政策、世論と相反するものはないようだ。海外に行くと、かつては栄えた都市が、産業の興廃や災害によって、ゴーストタウン化し、荒廃そのものの侘（わび）しい姿のままにされている地域がある。その地の産業が廃れ、働き場所がなくなると、当然のことながら若者は違う町に移り住み、老人だけが残る。残った老人も他の町に移り住んだり、亡くなったりすることでゴーストタウンになっていく。東日本大震災の後、高台に次々と住宅設備がつくられているのだが、そこに住む多くの被災者は高齢者である。10年、20年を考えると、いずれ新築された高台の住宅設備は、たぶん住む人もない住宅設備になるのは、誰もが予想できることだが、そのことを取り上げること自体、大批判にさらされることが目に見えているわけで、誰も口にしないというか、口にできないテーマである。被災を受けた不幸な方々に、できる限り早い段階で、安心して暮らせる場を提供するのが、国や自治体としての責務であるという基本的な政策に反対する人はいない。将来、どうするのかという考えは、視野には入っていても、議論するまでもない話である。災害の多い国に住む人々に対して必要な政策であり、被災者の生活を守るために必要な費用なのである。都会に出た家族が高齢者の肉親を守るといった家族観は、すでに崩壊しているわけで、被災という受難にあった高齢者の生活を守りきることが、国民のコンセンサスの上に、日本の政策の基本にあって、それがいいとか悪いとかの話ではない。

折角のオリンピックの開催となっても、新しい東京についての総合的な見直し策についての議論は、なかなかテーマとはならないようだ。IT（情報技術）の分野についても、日本における関心は、IT産業といった狭い領域にとどまっている気がする。欧米では、IT技術を利用して、各車の走行距離をデータ化し、走行距離に応じた道路利用に対するインフラ税といったことが、議論されたり、実験されたりといった動きがあるのだが、およそ、日本では、そんな議論は起こらない。クルマが情報通信端末になっている現在、ガソリン税に代わりうる徴税が、ITの利用によって可能になるのである。もちろん、あらゆる車の走行実績を管理するといったことが、プライバシー問題につながることは言うまでもないのだが。インターネットがあらゆる個人情報をビッグデータ化し、裸にすることが可能な情報通信基盤であり、その技術が加速度的に進化を続けている時に、その利用について、技術的な可能性を凝視した本質的な議論は、実行するかしないかは別として、単に「怖い」という感情論を

超えてすべき時だと思うのだが。日本だけが取り残されて、という時が来てしまうのではないかと、いささかの危惧が去ることはない。

来てみればわが故郷（ふるさと）は荒れにけり庭も籬（まがき）も落ち葉のみして

良寛が、長い漂泊の末、故郷に帰った時の歌である。故郷というのは、昔もそんなものだったようだ。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します。

鈴木幸一　IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。
こちらの投稿フォームからご意見をお寄せください。

読者からのコメント

N.E.Nishidaさん、30歳代男性
週明けが疲れた状態とのこと、私も休日の読書でほぼ同じ轍を踏んでおりますのでお気持ちが分かります。さすがにゴルフやオペラ鑑賞といった高尚な趣味の持ち合わせこそありませんが、休日だからということで小難しい古典などに手を出してしまう。こうなると翌月曜日睡眠不足への道をまっしぐらですね。さて、首都圏でもスーパー（マーケット）難民などの問題があると目にすることがあります。社会インフラに限らず広義には国の財政や年金の問題などにも通じることかもしれませんが、人口構造の変化を予測し認識していながら柔軟かつ迅速に対応できていないのが国家としての弱点の一つなのかもしれませんね。壊すべきは壊す決断、勇気とエネルギーは必要ですが大切なことだと思います。

団塊の凡人さん、60歳代男性
東京五輪は新しい東京を作るため思い切ったスクラップ&ビルドのチャンス…はその通りと思いますが、日本社会の現状からすると、悲観的にならざるをえません。何をスクラップし何をビルドするか？実行体制は？タイムスケジュールは？財源は？…等々、検討事項は多岐にわたりますが各テーマ全てで小田原評定が始まり結局は具体化せず…と。少子高齢化が進む日本の将来は誰もが分かっていながら、僅かな消費増税に反対し、高齢者医療の自己負担増に反対し、法人減税も反対、既受給者の年金減額など全く具体化しようとしないのが今の日本です。戦争ではなく知性による社会のリセットは、エゴ優先の我儘国民が多数を占める社会では、残念ながらできると思えないのです。

小倉摯門さん、60歳代男性
休日が増えることは一面で好いことですが、個人の生活やビジネスとのバランスが最も大切だと思います。今の政治にそんな広深永かつ国民の機微に亘ることに気配りできる道理はないのであって、個人が夫々に自分流で対応することが肝心だと。「カレンダー通りに動くのがサラリーマン、四方の状況に合わせて動くのがビジネスマン」と云う観方もある。良寛の書の真贋も価値も、所詮は自分の美観や価値観に合うかどうかだと思います。東京五輪が破壊のチャンスだとは刺激的な表題ですが、日本文化への深い造詣が呈した提言には目を瞑り伝統の誇りを育てる構えもなく、目玉施設に「舶来」のデザインを採用する干乾びた作業では、大国の首都の様相を猥雑なパッチワークに一変させて仕舞うのではないか。日本三大ホテルのうち私のお気に入り名門ホテルがこのチャンスを捉えて本館を建て直すと聞いても、期待はしても然程の危惧は抱かないのが面白いですね。

ないっふさん、70歳代以上男性
東京五輪で首都圏メディアが浮かれているようである。実は、日本に残されているわずかな未来の可能性を食い尽くしているのかも知れないという自覚がないことを心配している。新たな投資がかえって日本の傷を深めるようでは、困るのである。鈴木氏ご指摘の目先だけの効果しかなく長期的には無意味な投資が、なぜ、いまだに強行されているのか。東日本大震災後の復興住宅の四半世紀後もさることながら、われわれの周辺にある四半世紀前から半世紀前の頃に開発され、持て囃された団地群の現況を見れば、一面的な計画では、結局、投資は無駄になるということが否応なしに学習できるはずである。

ビジネスリーダー トップに戻る　ビジネスリーダー Menu一覧　経営者ブログ トップ

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.